

長崎にて

—鎖国の功績—

ポリテクセンター福井
(福井職業能力開発促進センター)

紙 博文

1. はじめに

2000年11月22～23日、長崎にて「国際労働シンポジウム in 長崎」が開催された。このシンポジウムは、日本とオランダとの交流400年を記念しての開催であった。現在、日本は戦後最悪の失業率を記録（2000年5月、4.6%、2001年1月、4.9%）し、ここしばらくは高止まりの感がある。奇しくもオランダは、1990年代の半ば以降、画期的な経済成長を達成し、大幅な失業率の改善もはかられた。それは、他国が見習うべき「サクセス・ストーリー」とも称されている¹⁾。

このシンポジウムでは、パートタイマー等非正規労働者の活用により事実上のワークシェアリングを達成したオランダ・モデルが、わが国の雇用（労働）政策に反映できるか否かが1つの論点であったように思われる。会場では、5人のパネリスト（鈴木忠雄 日経連副会長、笹森 清 連合副会長、七瀬時雄 雇用・能力開発機構理事長、篠塚英子 日銀政策委員、織作峰子 写真家、コーディネーターは、杉田亮毅 日経新聞副社長）による熱い討論が行われ、オランダ・モデルの特徴、および日本への適用について議論が交わされた。大きなテーマでもあり、ここで早急な結論を求めるものではないが、周知の通り、オランダ・モデルは、パートタイマーと正規労働者にかかる処遇上の差別が法律で禁止されていること²⁾を特徴としている。このためパートタイマーとフルタイマーの違いは単純に労働時間の長さだけ

となり、オランダでは労働者の多くがパートタイマーを選択し、雇用増加の大半はこのパートタイマーによるものと言われている。つまり、オランダはワークシェアリング形成のための法的な整備を行い、労使ともどもこのシステムを受け入れたのである³⁾。したがって、オランダはパートタイマー社会⁴⁾であり、パートタイム労働の世界チャンピオン⁵⁾である、と評されている。しかしながら、このオランダ・モデルでは、その前提に徹底的な低賃金労働の推進があったことは留意しておく必要がある。

一方、日本においても、おのおの経営者・労働者団体から多様なワークシェアリングモデルが提唱されているが⁶⁾、いずれも決め手を欠くようである。その理由は、これまで日本では、時短手法に長期休暇方式を選択することやパートタイマーを活用することはなかったこと。また、そもそもワークシェアリングという考え方自体、日本にはなかったこと、そして、そのことによる賃金の減額には労働者側からの大きな抵抗が予想されること、さらに、パートタイマー化の促進には、パートタイマー自身が多くを働かない理由としての所得税法の「103万円の壁」⁷⁾があること等、である。いずれにしても、法による周辺整備と労使、特に労働者側の意識改革が必要である。だが日本では、2005年から労働力人口が減少に転じ、世界で最も早く少子高齢化が進む。したがって、もし日本にワークシェアリングが導入されるなら、失業者の雇用創出のためというばかりでなく、高齢者と女子の雇用創出も睨んだ、ほかには例をみない日本独特のシステムを目指すものとなるように思わ

れる。

私はこのシンポジウムを聴講するため、生まれて初めて長崎を訪れた。長崎市は人口43万人。浦上川から長崎港にいたる川岸に沿って細長く市街地が形成されており、また、背後に500～800メートル級の山が勢いよく迫っている。市内を一望する稲佐山（標高333m）から眺める長崎の街は、細長く、少し窮屈そうに思われた。また、ここ稲佐山から見る長崎港は、天然の良港であることがみてとれる。このことは、長崎が港街として発展してきたことをわれわれに教えてくれる。長崎は、その昔、深江浦と呼ばれ、キリシタン大名としてポルトガルに好意を持っていた領主 大村純忠が支配する一寒村にすぎなかったが、1571年、純忠はポルトガルの要請をうけて海外（南蛮）貿易の門戸として長崎港を開いた。そして、この時から長崎の発展は始まったといえる。開港当時、人口千人程度であったものが港の発展とともに人口流入が相次ぎ、1700年頃には、約6.5万人にもなったという。また、この長崎は、1580年から7年間、キリスト教イエズス会の知行地として、一時、イエズス会の植民地的性格を帯びていたことはあまり知られていない。これは、領主大村純忠が、この地をイエズス会に寄進（贈与）したためである。純忠は、そうすることによって隣接する敵から長崎を守り、南蛮貿易による利益の独占を図ろうとしたのである⁸⁾。

長崎といえばこのように南蛮貿易の拠点港であったこと、またキリシタン宗徒と伝道の街であったこと、さらには、広島と同様、原爆の被災地であったこと、また、中学校時代に学習した“鎖国”の地であったことが思い出される。鎖国は他にみられないわが国独特の外交政策であり、政府が他国との通商・交通などを禁止または強く制限するもので、わが国では江戸時代、徳川幕府がこの鎖国政策を行ったことはよく知られている。幕府の鎖国令は1633年頃、奉書船以外のわが国貿易船の海外渡航を禁じたことに始まるが、決定的になったのは「島原の乱」（1636年）以降である。幕府はこの乱の背後にポルトガルがいるとして、ポルトガル船の来航を禁止し

た。来航が許されたのはオランダ、中国の2国であるが、この2国にしても長崎に限りその来航を許す、というものであった。しかも幕府は、この両国人を出島というわずか約4300坪の人口埋立地に隔離し、この地域のみで生活することを強いたのである。それ以来、長崎・出島は阿蘭陀屋敷とも呼ばれ、鎖国の代名詞となる。出島は、現在、一部復元がなされているものの、ほとんどがまだ埋もれている。しかし、将来的には国道、河川等も付け替え、当時の出島のすべてを復元させる遠大な計画があるという⁹⁾。

私は鎖国政策がわが国の文化や科学・技術に及ぼした影響について興味がある。今から400年も昔、この長崎・出島地区だけが外国、とりわけオランダ、中国との交流が許されており、ここから当時の外国の文化や技術が“細長い光”となってわが国に差し込んでいたのである。いわば、長崎・出島はそうした光が射し込む“窓”としての役割を持っていた。今も長崎の街に漂う異国情緒は、当時の日本が唯一世界に対して開いた“窓”であったこと—鎖国時代にあっても唯一、外国に門戸が開かれていた—、また、キリシタン伝道の街でありキリシタン文化が花開いたところ、そして、キリシタン禁制による殉教の地であったこと、日本最古の海外貿易港として外国人が多く住み着いたこと等、こうした歴史的な経緯からもたらされたものであろう。めがね橋、大浦天主堂、グラバー邸、オランダ坂、活水女学院と、この街にあるいずれもが異国の香りを漂わせている。

2. 鎖国の理由

なぜ、徳川幕府が鎖国を行うに至ったか？ 一般的にはキリシタンを禁制するためであると思われるが、樋口清之氏の“わが国からの銀の流出を防ぐため”という説が面白い。樋口清之氏は次のような主張を述べている¹⁰⁾。

「…家光がなぜ鎖国を行ったかという、その直接的な引き金は日本からの銀の海外流出を食い止めるためである。当時の日本は、世界でもノビスパンに次ぐ銀の大量産出国だった。ノビスパンとは、現在のメキシコのこと、世界一の銀の産出国であつ

たために、この銀をめがけて殺到したスペイン人に滅ぼされてしまった。そのノビスパンについて日本には銀が大量にあったから、銀の魅力に惹かれて安土桃山時代に、南蛮人たちが大勢、日本に押しかけたのである。したがって、海外貿易によって日本から外国に流出する銀の量はたいへんなものであった。この銀に対して、日本に輸入される品物は、虎の皮、麝香、鼈甲、珊瑚、ギヤマン（ガラス）など奢侈品の類で、いわば不要品ばかりである。

しかも、当時の上方商業の中心地である大阪は金本位制経済であった。その銀が大量に流出するとなると、大阪経済は破綻してしまう。一方、幕府のお膝もとである江戸は、金本位制経済であったが、いうまでもなく日本の流通経済の中核である大阪の破綻は、幕府にとっても重大問題であった。銀欠乏から大阪経済が破綻すれば、日本全国の物資の流通がストップし、物価騰貴などの経済混乱から、米を金に替えることで成り立っている幕府体制まで覆りかねないのである。キリシタン禁制は、鎖国を行うための単なる名目であり、ほんとうは銀の流出を防いで、封建制を維持するための手段だったのである。」

また、大石慎二郎氏は、「鎖国」とは、わが国が主体的に世界と接触するための1つの手段であったとして次のように述べている¹¹⁾。

「“鎖国”とは一度とりこまれた世界史の柵から、日本が離脱することではなく、圧倒的な西欧諸国との軍事力（文明力）落差のもとで、日本が主体的に世界と接触するための手段であった。つまり、“鎖国”とは鎖国という方法手段によるわが国の世界への“開国”であったとすべきであろう。したがって寛永の“鎖国”こそが日本の世界への第一次開国であり、世に“開港”という言葉で呼ばれている“安政の開港”は、江戸時代という時代の練成を経たわが国の第二次開国であったとすべきである。」

すなわち、鎖国はキリスト教を禁止するということより、実際には銀の流出を防止することによって、わが国の経済破綻を未然に防ぎ、諸外国に対してわが国が主体的に交渉する一手段であった、ということなのである。

3. 鎖国の功績

鎖国による第1の功績は、日本が自らの手でイギリス、フランス、オランダ等、先進国の植民地になることを防いだことである。現にメキシコがスペインに侵略され、当時の帝国が滅亡したように、日本も銀の流出から経済が破綻し、植民地化することが当然に予想できたことから、鎖国によりそうなることを未然に防いだのである¹²⁾。

また、文化的な面からも鎖国には日本独特の文化を育んだという功績がある。これは江戸時代における文学の完成度からも明らかである。つまり、鎖国により民衆の生活文化が高まり、上方文化、江戸文化という日本独特の文化が生まれたのである。上方文化は上方の富裕商人が生んだ豪華絢爛たる文化であり、江戸文化は一般庶民が中心である民衆の中で生まれた文化である。例えば、上方の近松門左衛門や井原西鶴の作品はいくら庶民的といっても、出典や文章は古典を踏まえていて相当難しい。ところが化政期の江戸文学は、一般庶民の日常会話の文学ではじまる。式亭三馬の「浮世風呂」にしても、熊さん、八五郎、さらには女将さん連中の井戸端会議、銭湯での裸で交わす会話等がそのまま描かれている。為永春水の「春色梅曆」は、江戸下町の男女の恋愛とか義理人情をあからさまに書いたものである。川柳もしかりである。また、芭蕉の俳句も庶民性を持った文学として位置づけられる。俳句からは、ほのぼのとした生活感情が伝わってくる。これらは、鎖国の中で江戸という時代に生まれ、大衆の文化として、その後、明治時代へと向かう庶民の大きなエネルギーとなったのである¹³⁾。

さらに、鎖国には当時の伝統的な技能・技術に大きな影響を与えた、という功績がある。つまり、長崎・出島を1つの窓として、そこから外国の進んだ科学・技術を積極的に受け入れたのである。このため、長崎には向学心に燃える有望な若者が集い、熱心に医学、天文学、絵画等を学んだ。そして、ここで取り入れられた学問が、これまであった伝統的技術と混じり、独自の技術、それは科学・技術ともいえる

のだが、それらがいっせいに開花したのである。水道技術、関 孝和の数学、青木昆陽の蘭学、伊能忠敬の測量・天文学、杉田玄白、前野良沢の医学（解体新書）等。これらはすべて世界的な水準であり、高く評価されている。“必要は発明の母なり”という「ことわざ」どおり、日本人は必要から工夫を凝らして何かを創り出す、また、創り出そうとする能力、“知恵”とそれを生かす“技”を潜在的に持っているのである。このことは、われわれの誇りでもある。

水道技術は、武蔵国の2人の農民、玉川庄右衛門、清右衛門兄弟の業績である。青梅の西、羽村の堰から江戸市中までの43キロをサイフォンの原理や高等数学を駆使し（この時代、こうした原理名はまだ名づけられてはいなかったと思うが…）、俗にいう玉川上水を完成させ、江戸100万の市民の喉を潤した。この時期にイタリア、ローマにも上水道が完備されていたが、サイフォンの原理までは使われてはいない。

また、関 孝和の数学は世界的レベルであったとされる。関 孝和は、小さいときから不思議なほど頭がよく、ことに物を数えることについては秀でていた。彼は、和算—日本の算法—について学び、さらにそれを1人で工夫し、これまで人の知ることのできなかった数学上の道理をいろいろ発見した。それは、後日、関流算法と呼ばれるようになった。あるとき、多分長崎・出島を通してだろうが、中国から渡ってきた書物のなかに、何が書いてあるかさっぱりわからない書物が1部混じっていた。仏教の本でもなく、儒教の本でもない。また、医学の本でもない。関 孝和は、その時、それは数学の本かもしれないとして、その本を取り寄せ、写し取り、3年かかってその書物に書かれている数学上の理論を明らかにした。それらは、「関流算法7部書」として纏められている¹⁴⁾。

青木昆陽は、世間では薩摩芋を全国で広めた甘藷先生としてその名前が知られているが、長崎で蘭学（オランダの学問）を修め、日本人で初めて横文字（オランダ語）を読むこと、書くことを習った、いわば洋学開祖の人である¹⁵⁾。

伊能忠敬の測量学、当時彼によって作成された日本地図は、現在のものと遜色はない。

伊能忠敬は、51歳のときに当時の幕府の天文方であった高橋至時の門人となり、西洋の暦学を学んだ。師匠の高橋至時は若くからオランダの暦書や啓蒙的な科学書に興味を持ち西洋天文学を研究し、翻訳も行っていた。高橋32歳、弟子忠敬は師匠より20歳も年上である。人はおかしく思ったが、忠敬は頓着せず熱心に暦学を学んだ。しかし、そのうち天体観測では物足りなくなり、天体観測の技術を応用して実際の土地を測り、正確な地図を作りたいと考えようになった。彼が56歳から日本各地を踏査し、18年の年月を費やして作成した日本全土の地図は、その後、写しがヨーロッパへ渡ったとき、その見事さに西洋の学者達は驚いたという。

さらに、杉田玄白、前野良沢は「ターフェル・アナトミア：日本語訳、解体新書」というオランダ語の解剖書を翻訳した。その翻訳時の苦労については、大内兵衛氏の「日本における学問の黎明—蘭学事始物語」に面白く書かれている¹⁶⁾。

「…数人が良沢の宅に集まって、『ターフェル・アナトミア』をあけた。あけてはみたが少しもわからない。『舵のない船』が大海に乗りだしたように、ぼうっとして、一同はただあきれてばかりいた。しかし、そうしてもいられないので、いろいろと相談をして、とにかく身体の外部的ことを書いてあるところからやろうということになった。それでもなかなかわからない。…鼻は『フルヘッヘンド』しているものであると書いてあるところに来た。ところが、この語がわからない。…『フルヘッヘンド』の註釈に『木の枝を断ったあと』そのあとが『フルヘッヘンド』をなし、また庭を掃除すれば、その塵土があつまって『フルヘッヘンド』するというような意味のことが読める。これはどういうことであろうと、例のようにこじつけて考えてみるが、それでもわからない。その時私は思った。木の枝を断ったあとはなるほどうずたかくなるし、掃除して塵土があつまるとこれもうずたかくなる。鼻は顔の中央にあつてうずたかくなっているものであるから、『フルヘッヘンド』は『堆』^{うずたかし}ということであろう。だから、

この語は『^{うずたかし}堆』と訳してどうであろうということ、一同はこれを聞いて、いかにもその通りである、『^{うずたかし}堆』と訳せば当たるであろうということで、そう決定した。…『シンネン』(zinnen) (精神) などという語が出て来たのには、まるで見当がつかないの^{うずたかし}で苦心した。そして、それらもそのうちわかるときもあろう、とりあえず符号をつけておこうというので、丸の中に十文字を引いて記しておいた。そんなわけで、そのころ、知らぬことを『くつわ十字』と名づけていた。会合の度ごとにいろいろと案を出し、考えてみても解し得ないことがあると、その苦しきのあまり、『それもくつわ十字、くつわ十字』といったものである。しかし『為すべきことは固より人にあり、成るべきは天にあり』というたとえのように、なるにちがいないと信ずればこそ、1ヵ月に6、7回集まってこのように思いをこらし、精力を費やして辛苦したのである。その予定日は怠りなく、おのおの集まって会議をして読み合って行ったところ、実に『不味者は心』という通りで、およそ1年余も過ぎると、訳語の数も漸く増し、読むに従って和蘭の国の事情も自然に了解できるようになり、あとになると文章、文句のまばらなところは1日に十行も、それ以上も、格別の苦心なしに解し得るようにもなった。…』

こうした苦しい翻訳作業が4年間続き、『解体新書』が出版されたのは1774年である。それは、アダム・スミスが国富論を出版する2年前であった。この『解体新書』の出版により蘭学が急に勃興しはじめ、彼らの門には多くの秀才が集い、さらなる医学の進歩に貢献をした。

要するに、鎖国ではあったが当時の外国の文化や科学は微かな光としてわが国に入ってきた¹⁷⁾。われわれ日本人は、この微かな光を自らの熱意によってとらえ、持ち前の努力と創意により工夫と改良を加え、それを独自の技術として進化させてきたのである。このことは、われわれ日本人の知恵の高さ、能力の高さを示すものである。つまり、われわれ日本人は、科学技術また文化的な面においても、ハンディを、それは鎖国というハンディであるが、プラスへと転換したのである。

4. 長崎にて—新しい価値観の創出—

現在、日本は世界のトップランナーとしてすべての面で世界をリードしている。しかしながら、現在、日本の状況はきわめて厳しい。バブル崩壊から10年、日本経済は出口のない不況にあえいでいる。バブル当時、日本企業の多くが巨利を追い、本業を忘れ、投機のなかに身を置いていたような気がする。何かを創り出す、また、生み出す知恵を忘れ、身体を使わず、汗を流すこともなく投機等からの儲けだけを追及していたように思う。当時は理科系の学生までもが“ものづくり”を忘れ、こうした企業を就職先として選んでいたことを私は記憶している。皆が何か浮かれたように一時期を過ごしていたように思われる。そして今、そのツケが回ってきているのである。バブルの崩壊とともに、これまで20世紀を通して進展してきた工業化時代が終焉を迎え、政治、行政、経済、教育、雇用等あらゆる分野でこれまでのシステムが制度疲労を起こして機能しなくなってしまっている。そして、いまや日本的な経営手法、日本的な意思決定の仕組み等も維持することが大変困難になってきている¹⁸⁾。このため、これらのあらゆる分野で、今、われわれに新しいシステムや新しい価値観の構築が求められている。例えば、前述した雇用の分野におけるワークシェアリングは、これまでにはない雇用政策上の新しい課題である。また、ものづくり思想への回帰はIT革新のなかでの新しい価値観の創出である。21世紀、われわれは足元をみつめ、着実に、そして早急に、これらの作業—新しいシステムや新しい価値観の構築—に着手し、作り上げねばならない。そして、きっとわれわれはこうした新しいシステムを必ずや作り上げるであろう。なぜなら、われわれは他国にはみられない独特のシステムを作り上げる能力、知恵、熱意、惜しみない努力を持ち合わせているからである。鎖国時代のことを思い出してみればいい。江戸から、320余里、長崎の地で皆が学問に励んだときのことを思い出してみればいい。西洋からの情報がないに等しい状態のなかで、皆で知恵を絞り『ターフェ

ル・アナトミア』を翻訳したときのことを…、そして、日本地図を必死の思いで作成したときのことを…、また、他国にはみられないわが国独特の文化を育んだことを…、また、鎖国によって当時の大国から自らを守り独自の主張をなしたことを…。長崎には、われわれのこうした努力、熱意、智慧、そして新しいシステムを作り上げる源があるような気がする。

5. おわりに

鎖国という奇異なシステムにより、わが国が当時の大国に対して独自の主張をなしたことは驚くべきことである。また、鎖国という閉鎖的な社会であったにもかかわらず、わが国独自の文化、科学技術が開花したことは、われわれの知的能力の高さを証明するものでもある。20世紀に創られてきたシステムが疲弊し、機能しなくなっている現在、われわれに求められるのは、われわれが鎖国時代に発揮したような柔軟な思考に基づく独創的な発想エネルギーと、それによってもたらされる、より低コストで、機能的な、富の再配分を考慮した、そして過度な個人主義的競争を排除する、すべての人に受入れ可能な共生社会システム機能の構築である。上述したワークシェアリングという雇用（労働）政策は、今後、こうした共生社会に向けての労使ともどもが構築すべき新しいシステムなのかもしれない。

〈注〉

- 1) 野村正實（稿）：「やさしい経済学③」, 日本経済新聞, 2000年10月9日付。
- 2) オランダでは1996年の民法改正後、パートタイム労働者とフルタイム労働者は、おのおの労働時間に応じて平等に扱われることとなった。(国際労働シンポジウム in 長崎の大会資料, ランデン大学フォス教授による講演要旨より)
- 3) 1982年, ワッセナー合意により賃金の上昇幅を押さえる代わりに, ワークシェアリング制度の導入が決定された。ワークシェアリング制度が実施されると労働時間は柔軟な形で短縮されるようになる。各企業, 各部門ごとにその実施方法を決定することができるため, 休日を増やすところもあるし, 隔週の金曜日を半日勤務とするところもある。(前掲大会資料, ランデン大学フォス教授による講演要旨より)
- 4) 野村正實, 前掲論文。

- 5) 前掲大会資料, ランデン大学フォス教授の講演要旨より。
- 6) 野村正實（稿）：「やさしい経済学⑥」, 日本経済新聞, 2000年10月13日付。
- 7) 荻野登（稿）：「国際労働シンポジウム in 長崎」, 大会資料『日本におけるワークシェアリング論と今後の可能性, 4. 相次ぐワークシェアリング導入の提言』を参照のこと。
- 8) しかし, 1587年, 秀吉による九州征伐が行われた際, 秀吉はこの地がキリシタン領であることを大いに怒り, キリシタン禁令を発するとともにこの地を没収し, 直轄領とした。
- 9) 「史跡出島和蘭商館跡復元整備構想」のこと。平成8年2月に答申された内容は, 19世紀初頭の出島を, 四方に水面を確保し扇型の往時に復元する長期計画と, 現在の出島の範囲のなかで復元しようとする短中期計画から成っている。
- 10) 樋口清之著：「逆・日本史」, 祥伝社, 1988年, 167-169頁。
- 11) 大石慎三郎著：「江戸時代」, 中公新書, 1977年, 19-20頁。
- 12) 樋口清之：前掲書, 171頁。
- 13) 樋口清之：前掲書, 71頁。
- 14) 森 銑三（稿）：「日本の歴史22 西洋への窓, おらんだ正月一抄」, 作品社, 1991年, 62-63頁。
- 15) 森 銑三：前掲書, 68頁。
- 16) 大内兵衛（稿）：「日本の歴史22 西洋への窓, 日本における学問の黎明」, 作品社, 9-20頁。
- 17) 「…当時の外国の文化や科学は微かな光としてわが国に入ってきた。」という通説に対して反対の見解もある。例えば, 辻 達也著「江戸時代を考える」中公新書, 1988年, 53-60頁では, 次のように述べられている。
「…鎖国下といっても決して文化交流の面で孤立していたわけではない。…明末から清にかけての中国文化はかなり影響を及ぼしている。…江戸時代は大陸文化との関係において, それ以前のどの時代にもまさるとも劣らぬほど密接なものをもっていったことが知られるであろう。要するに鎖国といっても, 文化的情報はかなり豊富に入ってきており, また日本の知識人はそれに鋭敏に反応した。つまり, 『日本的』文化の形成は, そういう刺激を受けつつ行われたのであって, 世界から隔絶・孤立のなかに熟成されたものとはいえないのである。」
その他, 同書158-165頁を参照のこと。
- 18) 清成忠男：第118回学位授与式告示要旨「法政大学校友会報」, 第371号, 平成12年5月30日付より。